

日本慈濟世界

日本ツーチーセカイ

2025年04月10日出版

第189期

主題報道：大船渡森林火災支援





造大福田結大福緣

每年歲末祝福時，總是會先看見一段慈濟的大藏經，分享這一年來慈濟人在世界各地所做的事。去年元月的第一天下午，日本能登半島發生大地震，突然間天搖地動，造成山崩地裂、橋斷路碎，許多房屋倒塌，有人傷亡，當地古樸寧靜的農村，瞬間亂了序，真是無語問蒼天。

於是，慈濟人從東京、大阪等地花了數小時車程，會合在災區訪視及膚慰。當時天氣冷颼颼，無家可歸者住在臨時收容所，志工除了送上毛毯、圍巾等實用物資，也趕緊張羅食材與鍋子，煮出熱騰騰的飯菜供應，讓他們能免於飢寒。當地年輕人多半到外地求學、工作，因此災民的年齡偏高，我們看到阿公、阿嬤們雙手捧著熱食的畫面，既溫暖又感動啊！

接著，考量日本物價不低，我們

提高救濟金額，根據家庭人口數多寡，給予災民相應的補助，讓他們能請工人、買建材來修復家園。幾個月下來，慈濟已於災區舉行五梯次，共發放了一萬五千多戶。

九月下旬，災區又發生水災，慈濟人中途在山路遇到土石流，寸步之差，車就可能被波及，幸好有驚無險，在分秒間避過了災禍，最後還能平安繼續前行勘災。有的受災家庭只剩下年長者，獨自面對災情不知如何是好，於是慈濟人投入清理、打掃。其實，居民需要的不是只有金錢或物資，而是一分安慰和陪伴，感覺有人關心他們，所以當志工協助環境清掃，就好像親人回家幫忙一樣，最後彼此都擁抱著哭了。

慈濟的精神總是一種及時付出的溫馨，不是「象徵性」的給予，我們

要做到讓接受的人有感覺，對他們真正有幫助。儘管很辛苦，慈濟人從不說「苦」，因為能助人就是快樂，從自己手中送出對方所需要的，覺得很幸福。牽起他們的手，關心「家裡如何？」了解他們一家幾口，給他們足夠的物資，這都是有感覺的發放。不管在哪一個國家，慈濟人都是懷抱同樣的心態，愛的呵護，非常溫馨。

師父很喜歡分享這些感人的事，大家也可以多向會員們分享。慈濟總是大家的發心，這分愛不影響我們平時的生活，以前是日存「五毛錢」，現在可以每天存「五元」。而平時點點滴滴的累積，一旦國際有災，我們都會及時援助，可以造大福田，廣結大福緣，實在很值得。

上人開示 二月號



盤點人生，留下歷史

自世間無常，天地四大不調時，就會引發地震、風災、水災等等災情。一旦大地有災，不論距離是遠是近，都令人感到不捨、難安，彷彿自己的心地也隨著災難而受傷。天災已經擋不住，我們唯有提起無常觀，呼籲人人用戒慎虔誠的心來祈禱。

常說「一善破千災」，大家若能削弱欲念、提升善念，共同啟發愛心、付出善行，就能消弭苦難、造福人群。慈濟人很貼近師父的心，總能把握時間發揮生命的價值，救助較無能力、需要幫助的人。然而一個人只有一雙手，力量有限，若能會合無數的人，無數雙手，就有千千萬萬的善，這種心念與力量即可感動天地人間，才有辦法讓重業輕受，破除天下的災難。

如去年十月底，強烈颱風「康

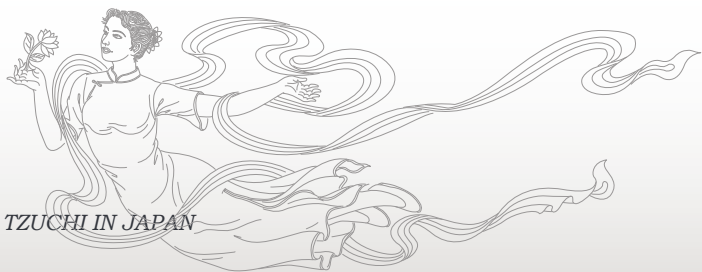
芮」登陸臺東，花東的災後景象令人怵目驚心，精舍也避不開這一陣強風的侵襲，有些樹木遭攔腰折斷，有些樹木被連根拔起。當時有許多慈濟人，自動自發安排梯次，接力從臺灣各地返回精舍，協助整理受強颱風破壞的樹木及環境；志工們也到災情嚴重的地方，為孤老無依、無力清理的民衆打掃與整修，讓他們的家園儘快恢復乾淨，能住得安心。風災後東部維修的師傅難尋，這一群學有專精的慈濟志工，暫時放下自己的事業，以志業精神從各地前往災區付出，令人感動。

今年一月下旬，嘉義、臺南一帶發生了大地震，雖然慶幸人人都平安，但是大地瞬間的威力，仍毀損了許多房屋。在地的慈濟人隨即投入關懷，然而當時春節將近，天氣寒冷，我既不捨災民難以安居，也憂慮著如

何動員慈濟人去幫忙。所幸全臺各地有修繕專長的志工，紛紛自告奮勇、有志一同，輪班前往災區投入，在大家合力趕工之下，受助鄉親能住得安心，不再驚惶受怕，這並非求而能得的。慈濟人這分用心投入的誠意，讓人感受到溫暖，見證了人間的有情大愛，真是功德無量。

感恩付出無所求的慈濟人，為了救拔苦難，願做「不請之師」，這不就是《法華經》所言，從地湧出、十方湧現的菩薩嗎？常說我們要盤點人生的價值，這不是要標榜自己，而是要顯示人間哪裡有苦難、有需要，菩薩就能及時現身關懷援助；留下行善的歷史，也期待人人都知道菩薩在人間的重要。

上人開示 四月號



大きな幸せの田を作り、 大きな幸せの縁を結びましょう

訳／金子昭

毎年、歳末祝福の際、いつも慈濟の「大蔵経」が初めに上映されて、その一年間、慈濟人が世界各地で行った活動について分かち合います。昨年一月一日の午後、日本の能登半島で大地震が発生しました。突然大地が大きく揺れて、山崩れや地割れが起こり、橋に亀裂が入り道路は途絶えました。数多くの家屋が倒壊し、亡くなる人もいました。昔ながらの現地の農村はたちまち混乱状態に陥り、まさに言葉を失い、天を仰ぐばかりでした。

そこで、慈濟人は東京や大阪などから、車で数時間の行程を費やし、被災地に集合し、被災状況を調査して被災者を励ました。当時は寒風吹きすさぶ天気で、帰るべき家を失った人々は臨時の避難所にいまし

た。ボランティアたちは毛布やマフラーなどの実用物資を手渡し、ただちに食料や器具の準備を始め、あつあつのご飯やおかずを調理して提供して、飢えや寒さを免れるようにいたしました。現地の若者たちは大半が進学や就労のために土地を離れています。被災者の年齢は高く、私たちはおじいさん、おばあさんたちが両手を用いて温かい食事をしている姿を見て、とても心温まるものを感じました。

それに続き、日本の物価高のことを考慮して、義援金の額を上げました。家族の人数に応じて、被災者に相応の補助を与えました。それは、彼らが大工さんを雇ったり、建材を購入したりして、家の修理ができるようにするためでした。数カ月以来、

慈濟はすでに被災地には五回出動し、合わせて一万五千戸以上の家庭に義援金を手渡しました。

九月下旬、被災地ではまた水害が発生しました。慈濟人は山路の途中で土石流に遭遇し、すんでのところで車にも被害が及ぶところ、幸い窮地を脱することができました。瞬時の内に災禍を避け、なんとか無事に被災地に入って、現地視察を行うことができました。高齢者ばかりが取り残された被災家庭もあり、災害に直面してどのように対処したらよいのか、分からない状態でした。そこで慈濟人は片付けや清掃の作業に入りました。実際、住民たちに必要なのは金銭や物資だけではなく、慰めと寄り添いであり、彼らをケアする人が必要でした。そのため、ボ

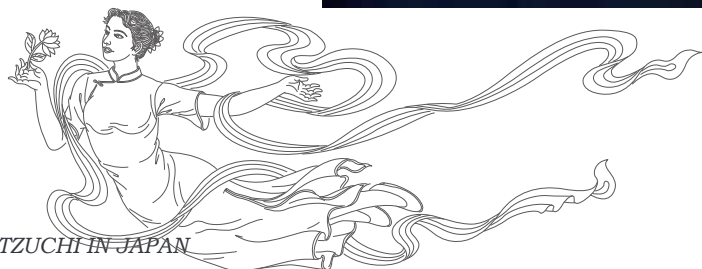
ランティアたちは家の周囲を片付ける手伝いをしました。その姿は、まるで身内の者が帰宅して手伝っているのと同じであり、最後にはお互いに抱き合って涙を流しました。

時宜にかなった支援を行う慈濟の精神は、総じて心温まるものがあります。これは「形ばかり」の施与ではありません。私たちはこれを受け取る人々が心から「助かった」と感じられるように心がけ、彼らに対して真心を込めた支援を行っています。たとえ苦勞があっても、慈濟人は決して「苦しい」とは言いません。人を助けることは喜びであるがゆえに、自らの手から相手が必要とするものを渡すことに、幸せを感じるのです。彼らの手を引いて、「お宅はどうでしょうか」と気遣い、被災者の家族が何人なのかを知って、十分な物資をお渡しします。これはみな心が通う支援活動です。どんな国であつても、慈濟人はいつも同じ意識、いたわりの心を抱いています。それはとても心温まるものであります。

こうした感動的な話が聞けて、また皆さまが会員にもそうした話をしてくれるのを、師としても嬉しく思っています。慈濟はいつも皆さまの発心から成り立っています。この愛の発心によって、私たちの日常生活はなんら影響を受けません。以前は、「五銭」を毎日貯めていましたが、今だったら「五元」を毎日貯金することができそうです。日々少しずつ貯めた蓄積があればこそ、いったん世界で災害が起これば、私たちはただちに支援に駆けつけることができるのです。大きな幸せの田を作ることは、大きな幸せの縁を広く結ぶことであり、実に価値のあることなのです。



■ 慈濟ボランティア達は被災地の方が更に水害にあつたのを聞きつけ、すぐに駆け付け家庭の清掃作業を手伝い、話を聞き慰めをしました。
写真／楊景升



人生をしつかり振り返り、 歴史に残していきましよう

訳／金子昭

この世は無常です。天地の四大地水火風が乱れる時に、地震や風水害などの自然災害が発生します。そうした災害がいったん発生すれば、それが近くても遠くても、人ごことは思えず、不安な気持ちになります。まるで自分自身がその災害によって心を傷つけられたように感じてしまいます。天災はもはや避けられないため、ひたすら無常を悟る心が必要です。そして、人々に向かって身を慎み、心から祈るように呼びかけるばかりです。

「一つの善は千の災いを取り除く」とは、よく言われることです。だけれども欲の思いを減らし、善の思いを増やして、共に愛の心を啓発して善行に励めば、苦難を無くして人々を幸せにすることができるといふように。

慈済人は師の心に寄り添い、時をのがさず、生命の価値を発揮し、寄る辺なく助けを求める人に手を差し伸べることが出来ます。でも一人だけなら二つの手があるだけで、力も限られます。もし無数の人たちが力を合わせ、無数の両手を合わせるならば、無限の善を発揮することが出来るのです。こうした心意気で力を発揮すれば、この世の人間にも感動を与えるものとなります。重い苦しみも軽くなり、世界の災いも和らげることが出来るのです。

昨年十月下旬、猛烈な台風21号「コンレイ」が台東に上陸しました。台風上陸後の花東は惨憺たるありさまでした。静思精舎もまたこの台風の影響を免れず、幹の真ん中で折れる木や、根から抜けた木もありました。

当時、多くの慈済人は、自発的に出勤回数を調整し、リレー方式で精舎に帰ってきて、被害を受けた樹木やその周囲を片付ける手伝いをしてくれました。ボランティアたちも、被害が大きかった地域に赴き、一人暮らしのお年寄りや、自分で清掃が困難な人たちのために、掃除や片付けをしたりしました。おかげで家の庭などもきれいになって、安心を得てもらうことができました。台風通過後、東部では修理の専門家がなかなか見つからず、技術を持っている慈済人が、自分の仕事を脇に置いてまで、ボランティア精神をもって各地から被災地に向かい、人々に感動を与えました。

今年一月下旬、嘉義、台南一帯で大きな地震が発生しました。幸い

の人々は無事だったのですが、瞬時に大きな威力で大地が揺れたため、数多くの家屋が損傷を受けました。現地の慈済人はただちに支援に取りかかりました。しかしその頃は旧正月も近く、天候も寒冷でした。私は、被災者が安心して暮らせないことが気になる一方、慈済人がどのように支援に行ってもらうか、気をもみました。幸い、台湾全土の修理に長けたボランティアたちが次々と名乗りを上げて、有志でチームを組んで被災地に入りました。皆が力を合わせて工事を早めることで、地元の人たちが安心を得て、もはや恐れを感じることがなくなりました。これは得がたいことであります。慈済人が今回、心を込めて動いてくれた誠実な姿勢には、人々は心温まる思いを抱き、また世の中に情けと大きな愛があることが証明されました。その功德は限りないものがあります。

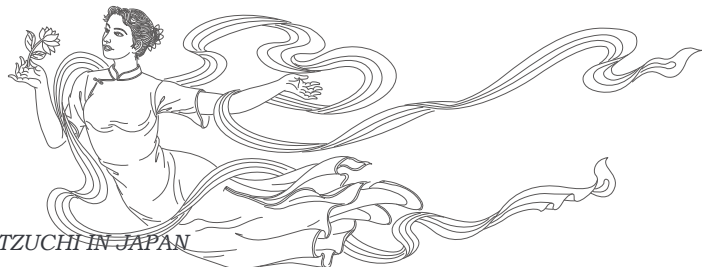
の師」になることを願います。まさに、『法華経』でいう、大地から湧出し、至る所に出現する菩薩ではないでしょうか。人生の価値をしつかり見直すことが大切だとよく言われます。これが意味するのは、自分のことを誇示せずとも、この世のどこでも苦難があり、助けを求める声があれば、菩薩はただちに現われて支援を行うことであります。善行を歴史にしっかりと残していくことで、菩薩がこの世で重要な存在であることを皆さんに知ってもらおうよう、切に望んでいます。

静思

見返りを求めず尽力する慈済人には感謝の意を表したいと思います。彼らは苦難を救い、自ら「率先垂範



■ 慈済基金会は、台湾台南の楠西区の避難所において「福慧パーテーション（福慧隔屏）」を提供し、被災された方々が一時的に安心して身を寄せられる場所を設けています。写真／花蓮本部



2025 年 04 月 10 日発行 189 号

発行人：釋證嚴

発行所：台灣佛教慈濟慈善事業基金會 日本分會

編集メンバー：

許麗香 張秀民 陳靜慧 王秀寧
陳詩萍 小野雅子 黃韻璇 王姿文
簡毓嫻 莊雅婷 張濟梅 池田浩一
滝古道信 慈 涓

《上記以外のご協力の方にも感謝致します》

住所：〒169-0072
東京都新宿区大久保 1-2-16

電話：03-3203-5651

FAX：03-3203-5674

E-MAIL：tzuchi@tzuchi.jp

郵便口座：00190-4-753352

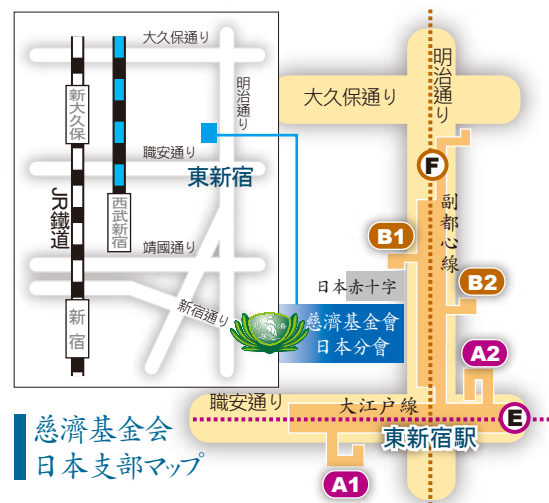
口座名義：仏教慈濟基金會
ブッキョウジサイキキンカイ

時間：毎日 9:00 - 17:00

HP：<http://tw.tzuchi.org/jp> (日本)

HP：<http://www.tzuchi.org.tw> (台湾)

いつも「日本慈濟世界」にご支援頂きありがとうございます。
これからもご協力下さいますよう、
宜しくお願い致します。



【日本慈濟世界】
ホームページ

CONTENTS



表紙写真：

岩手県大船渡市赤崎町地区で二月二十六日に発生した森林火災は、乾燥と強風に煽られ火勢は六日経っても衰えず、四千三百人余りが避難を余儀なくされました。これは日本において、ここ三十年来最も深刻な森林火災でした。

14 年後、今度は森林火災により家屋が準半壊以上の損害を受けた住民へ世帯人数に応じて 10 万円、15 万円、20 万円を支給し、少しでも急を凌げればと、再び大船渡市へ足を踏み入れました。

20250405 三陸公民館で見舞金配布の様子。写真 / 洪秀瑩

上人開示 (證嚴法師の教え)

00 造大福田 結大福縁

釋證嚴

01 盤點人生 留下歷史

釋證嚴

02 大きな幸せの田を作り

金子昭

大きな幸せの縁を結びましょう

金子昭

04 人生をしっかりと振り返り

金子昭

歴史に残していきましょう

金子昭

主題報導 (トピックス)

08 重返大船渡 見舞金發放在即

雙月刊小組

編輯

27 森林火災見舞金配布 再び大船渡

真鍋誠

訳

11 與愛同行 灰燼中的曙光(一)

雙月刊小組

編輯

31 愛とともに歩む 灰燼からの夜明け(二)

岩村益典

訳

14 愛的共善 縁份不可思議(二)

雙月刊小組

編輯

33 愛で繋がる絆 不思議な縁(二)

岩村益典

訳



189 号「上人開示」 文章掲載について

この度の「上人開示」の文章について、月刊誌の発行は通常二か月に一度ですが、大船渡森林火災支援のため 189 号は特別に二つを同時に掲載し、お届けいたします。

ご理解の程、よろしくお願い申し上げます。

慈濟編集部より

日程表

裏二〇二五年五、六月行事曆

王昆京

活動報導 (イベント報告)

17 東北地區祈福感恩會

許麗香

18 揮別震驚舊歲 喜迎平安福氣年

陳雅琴

20 力行菩薩道人文體驗攤位

黃韻璇

21 關西祈福感恩會美善愛循環

王孟專 陳靜慧

23 善的效應 愛心化清流

姚春紅

25 大阪小學生 馳援臺灣地震

施燕芬 陳靜慧

39 大阪の小学生からの 台湾地震援助

吳俞輝

訳



■ 13位志工由陳金發師兄領隊
前往大船渡。攝影/吳惠珍

大船渡賑災——勘災與前置

重返大船渡 見舞金發放在即

編輯 / 雙月刊小組（文稿提供/林玲俐、吳惠珍、朱家立、洪秀瑩、許麗香、陳靜慧）

十四年後，因著一場森林大火，慈濟志工再度踏上大船渡市，針對住家準半壞以上的住家發放見舞金，依家庭人數提供十萬日圓、十五萬日圓、二十萬日圓不等的現金，希望為鄉親緩解一時之急。

日本岩手縣大船渡市赤崎町地區自二月二十六日發生森林火災，因為天氣乾燥加上強風，火勢經過六日後仍持續延燒，造成超過四千三百人被避難，是日本三十年來最嚴重森林大火。三月五日至三月六日，連續兩天下雨，大火沒有再擴大範圍。三月九日，政府宣布火勢已被「鎮壓」，不再延燒。三月十日，政府宣布解除避難指示，鄉親們陸續回家。截至三月十五日，仍有一百九十九人避難。根據官方房屋受損統計，這次造成了住家燒毀一〇二棟。

因著愛 我們再來

岩手縣大船渡市位於日本東北，距離東京日本分會五百五十公里，車程約七小時。回首十四年前，3・11東日本大地震發生後，慈濟志工三月下旬首次進入東北災區物資發放，首站即抵達岩手縣大船渡市，致贈避難所居民香積飯、毛毯、披肩、衛

生衣和堅果仁。二〇一一年八月，慈濟志工再度到大船渡市，為住家半壞以上的三千三百五十五戶受災鄉親發放見舞金。

發放在即 前置作業

從準備賑災物資的那一刻起，「感恩、尊重、愛」便無處不在了。高齡八十二歲的志工也是茶道老師的張好，把握因緣，以拿手的茶食與鄉親結善緣。用淨斯產品麻芽粉、山藥杏仁、薏仁粉，加入三種水果乾製作的茶食非常營養，可口不甜膩。

二十九日，為了這次的一百多份見舞金封套，日本分會的志工們從選紙到裁切，都非常用心。期待災區的鄉親們拿到這一份手作封套時感受到這一分溫度。製作過程中戰戰兢兢，深怕一個不小心割壞了紙張，會浪費了一張一百多塊日幣的紙。

慈青李彥霈分享：「裁紙時，每一個細節我都想做到最好，每個步驟也誠心默念佛號，

並予虔誠祝福。希望可以讓鄉親在拿到時就感受到我們對待發放的認真。」大家很有默契分工，全神貫注，希望能將這些用心傳達給鄉親們。

各功能組 各就各位

總務組將熱食發放的道具裝箱，鄉親關懷組也將文宣與結緣品裝箱。行政組確認接駁的大型巴士與路線及住宿，以及確認細流。發放組事前準備與測試，行前叮嚀會上說明發放流程並展示「叫號系統」。為了將歷史完整保留，鄉親關懷組互相確認組員手機上是否有「錄音」軟體，能夠即時留下關懷記錄。年輕的志工貼心教導年長的志工錄音操作流程，雖然發放的戶數不多，但志工一樣用心縝密規劃，對於發放流程，依然一遍遍說明、演練。

東北鄉親 我們來了

四月四日，二十三位志工



3



1



2

■ 1 年輕的志工貼心教導年長的志工錄音操作。攝影/吳惠珍

■ 2 志工張好用淨斯產品麻芽粉、山藥杏仁、薏仁粉，加入三種水果乾製作的茶食非常營養，可口不甜膩。攝影/吳惠珍

■ 3 慈青李彥霈(右1)用心裁切見舞金封套。攝影/吳惠珍

由日本分會督導陳金發領隊，搭新幹線前往仙台，抵達後再換箱型車前往發放地點。大隊來到「三陸公民館」後，志工們進入發放會場開始布置。從東京來的物資車抵達時，志工們合力卸下發放物資。分類後，分別搬到各功能組預定位置。發放組志工立即測試叫號系統，也開始進行場佈，告一段落後，由執行長許麗香帶著大家拿著茶食拜訪會館的職員。一塊親手作的糕點，是遠方捎來的溫暖情誼，會所的職員翹起大拇指，說「好吃極了。」

這次發放見舞金，首次同步提供熱食，志工抵達後，立即前往在地的Majica超市購買新鮮蔬果，要以當地食材烹煮蔬食，提供給鄉親最即時的溫暖。

山崎充先生是第一位來到會場幫忙的東北鄉親，家住大槌町，現在是大槌町議會議員。3・11時因為領了見舞金的因緣認識慈濟，多次參加志工活動，目前也參與慈濟在大槌町的新芽助學金發放。



■ 大船渡市長 洲上清先生 專程來探望並道感恩，執行長許麗香為市長介紹證嚴上人給鄉親的慰問信函。攝影/吳惠珍

大船渡賑災（第一日）

與愛同行 灰燼中的曙光

編輯 / 雙月刊小組（文稿提供 / 林玲俐、
吳惠珍、朱家立、洪秀瑩、許麗香、陳靜慧）

發放現場 愛的共善

一早，發放現場，媒體匯

大船渡市森林火災見舞金發放第一天，志工規劃要以飯香、茶香，寬慰鄉親。

在安單的三陸市嶺復興交流中心內，一大早，志工開始洗米、泡茶。以淨斯翠玉烏龍茶，醒茶、泡茶，調和溫潤口感。

「絆」是拉長情 是愛的種子

日本分會行政主任陳思道，3・11時還是上班族，向公司請假，多次前往東北，此次同樣承擔發放的協調組。這一次賑災發放的規劃內容與動線，希望能夠多跟鄉親關懷、互動。

原來這是參考了去年在能登賑災時的經驗，當時發現年輕志工與年長志工們各有專長，希望結合這兩股力量。「我們以往沒有嘗試過在等待領取見舞金的時候供應鄉親熱食及奉茶，期待與鄉親建立更多的互動情誼。」他說，以往在賑災時，重點可能會圍繞在災難，發放見舞金，戶數可能是上千上萬。但這次雖然戶數沒有那麼多，可是同樣是受災，也很需要我們去膚慰。

日文中的「絆」字，一般翻譯成「牽絆」。他表示「這次給我一個非常深的感受，覺得並不是那種很黏膩的情，是一種很親切、很清澈的情，更像是證嚴上人告訴我們的『拉長情』」。

回首3・11「當時還沒能具體的知道，到底我們可以跟他們結什麼樣的緣？能夠做什麼樣的援助？」帶著來自全球的愛心及使命感踏入東北，到底如何做？不知道！唯一確定的是要想法把愛心傳遞給鄉親，讓他們知道有很多人與他們同在。

這次在前往大船渡市協調行政作業時，讓他深深感受十四年前愛的力量，以及「種子」的意義。志工是一顆愛的種子，「那顆種子可能就這樣子種了下去，只是不知道它什麼時候發芽。十四年前播下的那顆種子，包括當地的志工，甚至當地的報社，他們對十四年前慈濟走進來的那個印象非常深刻。那一份愛，其實就一直留在他們的心中。」這一次，當賑災方案碰到瓶頸時，有許多當地的種子們都主動跳出來幫助。

十四年後再踏上大船渡這塊土地，因為有那顆「絆」的種子，成就了今天。對志工們來說，一切只有道不盡的感恩！

受災也要向前看

聚，心大則同，都是為了愛。大船渡市長洲上清先生也專程來探望志工並道感恩，執行長許麗香為市長說明發放流程，並介紹證嚴上人給鄉親的慰問信函。市長表示，「剛剛聽說此次也跟二〇一一年東日本大地震時一樣，我們得到了像慈濟這樣的資源，真的深深體會到慈濟志工們的熱忱。」

東海新報編輯局記者佐藤壯先生數次持續發佈與報導慈濟發放見舞金的新聞，他分享，「十四年前在避難所親眼見證慈濟和鄉親的互動，決定報導這個提供援助的團體。當時受災者對援助抱有戒心，擔心會有附帶條件，但你們無所求地援助，讓人歡喜。過了十四年，現今政府尚未提供任何現金援助，而你們再次伸出援手，對受災者是最直接的幫助。」還說，感受到慈濟的溫暖和心意，日本民眾對台灣的親近感也因此增加了。

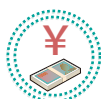
第一位領見舞金的鄉親是千葉女士：「沒想到這麼快就可以領到現金，非常感動！」有位古內奶奶領取見舞金時，十分感動地向志工敬禮。奶奶全身冰冷，志工幫忙搓搓手讓奶奶直呼好溫暖。

有位志田勝芳先生，一家五口，四個世代同住在避難所，全毀的房子已沒有能力再蓋。3・11地震時，他們的家是半毀，沒有接到通知，所以沒有領到見舞金：這一次領到現金和毛毯，內心非常感恩。

面對天災無情，有許鄉親正向面對。有人兩間房子都燒毀了，說：「即使受災，也是向前看」；有鄉親分享「生活從零開始沒關係，人平安最重要。」

橋本女士與米澤女士原本是好朋友，結果失去聯絡，今天在發放現場的停車場巧遇，高興到哭出來了。她們分享彼此對這次遭受火災的心境，她們說失去所有了已經是事實，這是天災，想也沒有用，就不要想太

大船渡森林火災支援



● 見舞金配布
4/5-4/6、延べ 65 世帯
合計 :10,050,000 円

● 配布対象
住居が準半壊以上の被害を受けた世帯
1人世帯 10万円
2-3人世帯 15万円
4人世帯以上 20万円



● 炊き出し
4/5-4/6
2日間
合計 303 食



● エコ毛布
ショール
4/5-4/6
合計 214 枚



● ボランティア動員
4/5-4/6 2日間
合計 129 人



多，反而要更正向去過生活。

佛經教導，世上錢財是五家共有，天災來了甚麼都帶不走。地水火風，世間的東西沒有永遠是我們的，所以兩位鄉親的態度，讓志工非常受用。

環保毛毯與披肩 來自全球的愛

環保毛毯是由寶特瓶回收再製而成，物命再生，還助益慈善賑災，善行繞全球。

為體貼高齡者與身障者，還備環保披肩，希望能夠為他們增添一分溫暖與保護。見舞金發放現場，同步發放環保毛毯與披肩，希望能夠一無所有的受災鄉親，提供最即時的愛與呵護。

■ 1 鄉親關懷組志工郭惠珍向鄉親介紹編安吊飾。攝影/朱家立

■ 2 當地志工片山月江女士(右)說：為了回饋十多年前的恩情，我今天來付出當志工。」攝影/吳惠珍

暖心 熱食與茶食

志工親手製作熱食，一起用餐，以滿滿的愛溫暖鄉親的胃與心。袖野先生也是一次受災，3・11時，他的家全毀。努力了七年，終於重建即將完成，最近孩子長大，於房子旁邊再增建一棟，預計今年完工，無奈未完成的卻被林火燒成灰燼。他告訴志工，「拿到見舞金之後，他要蓋一個農作工具屋放他的工具。」見舞金的金額遠遠不夠他重建新屋，但蘊含的溫暖可以陪伴他展開新生活要踏出的第一步。

泉惠女士從媒體知道發放的訊息，但是「不敢相信有這樣的團體來發見舞金，半信半疑帶著孩子一起來」當領完見舞金，她背對著孩子，靠著志工肩膀淚崩了。

火災後，她雙手空空的帶著孩子在避難所生活，為了孩子的未來，她很擔憂，她告訴自己要堅強，所有壓力終於在這一時刻釋放了。志工告訴她，你儘管哭，

沒關係！

本地志工 種子萌芽

3・11海嘯之後，慈濟人十梯次見舞金的發放，持續在當地辦茶會、感恩會。這次賑災團成員七十人中，有來自東北各地的本地志工二十多人。來自不同地點，本地志工抵達後立即投入各功能組，付出己力，由鄉親來庇蔭鄉親，不分你我。所有志工一起從一杯茶、一小塊茶食、一個傾聽開始陪伴。

吉田瞳女士是氣仙沼市的職員，3・11海嘯時曾協助慈濟發放。先生吉田充今日也一同協助見舞金發放。慈濟志工的願行，令她感動滿滿，找到重新站起來的力量。

片山月江說，「十多年前，因為你們的幫助，才有今天的我們。那時的恩情，我覺得現在必須要付出。希望我能夠回報一點點。」平山睦子協助香積運作，她說：「十四年前一切被一

掃而空！感謝你們，我重新站起來了；也感謝這次沒受災今天才能來幫忙。」

佐佐木善仁校長此次協助膚慰鄉親，他來自陸前高田市，是3・11受災鄉親。他說，受慈濟很大的幫助，所以還要來到幫忙。

及川榮勝是3・11受災鄉親，經常到慈濟石卷共修處幫忙。3・11時，及川榮勝先生領了見舞金之後，隔年到

日本分會捐款回饋，第一次聽到慈濟志工介紹「竹筒歲月」的因緣時，他深深地感動，決定也要日行一善。他開始「每天睡前將銅板投入竹筒後在月曆上畫個『X』，但有時也會忘記，就連續投幾個銅板，再畫一個大『X』。」不因善小而不為，是他最大的收穫。

在地串聯 共善的好夥伴

3・11地震時，遠從新潟前來的相羽利子女士從未缺席。她與慈濟的因緣來自於陸前高田市見舞金發放時，看到志工們即使日語不流利，但仍然全力以赴，這讓她對慈濟的精神感到非常佩服。之後，每當有需要都會開車前來，與慈濟志工見面，表達自己的感激與支持。她也表示，自己有一份責任感與使命，會持續為慈濟貢獻力量。

今野芳彦先生在3・11時是大船渡市役所課長，協助

慈濟在大船渡市發放見舞金。此次山林火災發放，協助勸災、連繫當地。

微光匯聚 感恩有您

第一天發放圓滿，大家齊聚聆聽在地志工的分享。日本分會督導陳金發感性地說：「這十四年來東京的志工幾乎每年都到東北來關懷，這一份長情大愛就是（證嚴）上人的法，我們不斷把大愛撒出去。」看到了，「二十多位現地的鄉親，從各地來，還有相羽女士從新潟開了三個多小時，來到大船渡。這不是一次性的救災，而是要把大愛傳出去，拉長情擴大愛。」最後期勉大家，一定要往前走，還要繼續每年都要到東北來做關懷。

從3・11至今，有志工從青絲到白髮，有從學生到上班族，十四年來，對東北的愛與承諾不變，慈濟一直都在。



愛的共善 緣份不可思議

大船渡賑災(第二日)

編輯／雙月刊小組 (文稿提供
／林玲俐、吳惠珍、朱家立、
洪秀瑩、許麗香、陳靜慧)



■ 專業主廚洪金盾希望能用自己的拿手菜來傳遞溫暖，今天的熱食菜單是「麻婆豆腐」。攝影／朱家立

大船渡市見舞金發放的第一天，一早，就感受到愛的共善。NPOおはなしころりん是日本非營利組織，主旨為促進婦幼福祉。這回自網路募集到一些善款，但是不知道該怎麼發放，所以派員前來觀摩，也發放通知單給鄉親。組織成員江刺由紀子女士分享，來自臺灣民衆的各種留言和物資確實鼓舞了大家，鄉親們離開時臉上都洋溢著幸福的表情。身為大船渡市的市民，她很感激。

家被海嘯沖走，她原地重建，十三年後又遇火災，然而，本身是大腸癌患者的她仍然非常樂觀地說，碰過這麼多的苦還有什麼過不去的。「一切歸零，生活從採買一雙筷子重來，拿到見舞金後要先買一臺冰箱。」因緣奇妙，她拿到的靜思語是：「人生會遇到各種困難，只要用心面對，再大的困難也會變得微不足道。」她感觸很深地說，真的很對應她的人生，她決定要把這張靜思語放在包包裡，增加她的力量。

各功能組志工，一早就各就各位，互相補位。專業主廚洪金盾希望能用自己的拿手菜來傳遞溫暖，今天的熱食菜單是「麻婆豆腐」。天氣稍微轉冷，熱食溫暖了大家的身心。志工邀約下，有些昨日來領見舞金的鄉親也帶著家人前來用餐。

佐藤先生從事漁業，是位獨居長者，有兩個女兒。次女年輕時因工作意外成為殘障人士，目前住在療養機構。他罹患肺癌，但為了女兒不能死，邊說邊流淚：「靠著微薄的年金，生活十分困難，不知該怎麼辦。」受到來自遠方的幫助，他感到非常溫暖，頻頻向志工致謝。

二次受災 化埋怨為感恩

東北本地志工 愛的回饋

木村女士(假名)是海嘯、林火二重受災者。3・11時，

陸前高田市的本地志工佐

佐木善仁，連著三天都來會場幫忙。第二天志工專程前往他成立的機構彩虹之家參訪，免費提供給不登校的自閉症孩子與家長。3・11海嘯時，妻子伴同不願離家的兒子一起罹難，佐佐木校長延續妻子的心願，把退休金都投注在此。他分享和慈濟的因緣，是接受了那麼多見舞金後，一直希望好好地表達感謝。

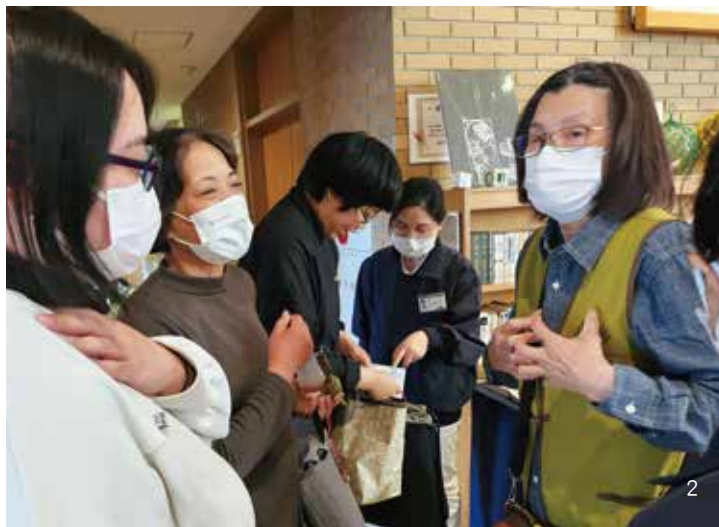
所以這麼多年來，只要慈濟要來東北，「我一定會在我力所能及的範圍內積極參與。」

同樣心情的，還有連著二日都來承擔志工的岩鼻清一，他是釜石高中的老師，他與太太美奈子，是3・11時的受災戶。岩鼻先生與志工們分享十四年前的記憶。「突然間，我收到了一張明信片，上面寫著要致贈義援

金，是佛教什麼的單位」，當時，因為有許多來自不同宗教團體的聯絡，所以心裡保持著警戒心。後來從網路調查後，知道慈濟是一個國際性的組織，才決定前往領取。

當時因為工作的關係，是由家人代領。二年後，有次聽到太太提到，慈濟好像每年都會來災區問候大家。「一直非常在意的，就是沒有親自道感謝這件事」，岩鼻老師說：「我們就決定去打招呼道個感謝，是這樣開始和慈濟的緣份。」從那時起，「透過志工活動，感受到人與人之間的聯繫，原來是這樣子。我經歷了在學校學不到的東西，課本上學不到的事情，改變了我的人生觀。」

「每當和你們接觸時都會感受到剛才說的『絆』，還有你們常常說到『緣』這個字。」從那以後岩鼻老師與太太，就一起參加志工到現在。同時，二〇一八年慈濟首度在大槌町發放新芽助學金時，岩鼻老師承擔司儀。



- 1.「NPOおはなしころりん」的江刺由紀子女，見了這份報紙後，前來商量，讓他們可以發傳單告知鄉親，他們也募了一些善款，請鄉親依日期前來領取。攝影／吳惠珍
- 2.當地志工岩鼻美奈子女士(右)，把握因緣向鄉親介紹慈濟。攝影／朱家立
- 3.鄉親關懷組發揮團隊力量，給鄉親溫暖。攝影／朱家立

■東松島渥美巖市長，每年都前來參加祈福感恩會。



東北地區 祈福感恩會

十四年來 愛不間斷



撰文／許麗香 攝影／李月鳳

二〇一一年三月十一日的大海嘯，像一場惡夢，摧毀了無數人的家園。慈濟人這一年走過岩手縣、宮城縣、福島縣等二十五個市町村，發放見舞金，並提供毛毯、披肩、營養食品，還有禦寒內衣褲。之後每年持續前往開茶會與關懷，並在大槌町與氣仙沼市提供新芽助學金。

十四年來，志工年年前往舉辦祈福感恩會，其中東北志工奧田正行，都會帶來竹筒捐愛心，在前年捐來的竹筒內，有一串用繩子綁的五元日幣，去年一月奧田先生往生，彷彿知道將離我們遠去，用此結下深深的

緣，跟我們告別。我們也捨不得，所以換了同等幣值，把這份愛帶回給奧田太太，告訴她，這是奧田先生留下的紀念物，希望她能留下永遠陪伴她。隔天奧田太太來參加祈福感恩會，又把這串五元帶來，說是奧田先生捐給慈濟的，還是請慈濟留下。奧田太太也帶來她的愛心竹筒回家，要繼續先生所留下的遺願。

第一場 東松島A〇〇西集會所

一月二十五日，志工一早到達東松島A〇〇西集會所，跟當地志工一起佈置會場。茶道志工張好珍惜跟鄉親們的因緣，每次特別挪出時間從台灣來參加東北祈福感恩會，指導志工奉茶禮儀，以及如何泡出一杯溫暖人心的好茶。

日本志工井田幸枝，受證委員後第一次參加東北祈福會，同時承擔司儀。志工龍騰長途駕駛之外，還承擔各種功能，包括音控等等。與司儀配合默契十

足，現場氣氛進行很順利。菩薩雲來集，今年參加者超出預期，臨時增加桌椅，在等待的時間，喝杯靜思茶暖身，讓整個會場增添不少歡樂氣氛。東松島渥美巖市長，也分享他到臺灣參訪大愛電視臺的歡喜。

第二場 石卷渡波公民館

一月二十六日，第二場在渡波公民館，石卷市市長齋藤正美與丹野議員，分享前往臺灣大愛臺參訪感想。

領到證嚴上人的祝福紅包，鄉親們都非常開心，在歡喜中品嚐靜思烏龍茶跟茶食。東北志工種子張君分享石卷共修處每個禮拜的活動，希望能廣結善緣招更多的菩薩。

最後大家一起點亮心燈祈禱，凝聚善念祈求天下無災難。期待不久很快再相聚，也期待彼此的長情大愛能夠長久久久。



■志工謝玉潔，把握因緣與鄉親互動。攝影／吳惠珍

鄉親關懷組的謝玉潔，從慈青學生到受證委員，因年紀輕、有創意，有時需要磨合不同世代的做法，挑戰更多。她分享，因為心智比較堅定了，不再找藉口逃避責任。最大的改變應該是變得比較可以吃苦，也願意去吃苦，更願意去嘗試新的事情。

這次發放過程有新做法，負責財務發放的李浩溶設計的現場電子叫號系統，讓不同空間的人都知道現在叫到幾號，節省許多人力。李浩溶雖不是程式設計師，她利用A1寫這個程式，每天測試改良終於完成。

鍾佳玲，3・11時以慈青學姊的角色，帶領陪伴一群慈青同學投入賑災。這次承擔協調，既要體貼照顧年長的師姑師伯，也要陪伴年輕人。常在群組中發出小小叮嚀，提醒大家注意事項，也關注每一則訊息，即時更正補充。希望透過自己的提醒，可以減少總務機動臨時加班採買的次數。

施美君以前害羞聲音小，

現在承擔行政，負責交通住宿的瑣碎細事，為了能夠將該提醒的話勇敢地說出來，儼然從小慈青成長為團隊的嚴格小管家。

副執行長林真子分享，家訪時看到受災鄉親住家燒毀的現況，他們雖然堅強，但看了真的很不捨。上人要我們當他的手、腳、眼，這次我們都辦到了！除了有最到位的膚慰外，還有年輕人教我們如何有條理地錄音留下記錄和足跡。

副執行長蘇美菁承擔協調組，3・11時與姊姊井田音心都還是灰衣志工，如今二人都承擔重任。她記得3・11時，年長志工教她奉茶，一輪又一輪，來來回回洗杯子，絲豪沒有倦怠。而小小一杯茶，就讓鄉親們無比感動。從一杯茶的力量，也驚覺這個團體真的不一樣。參加過多次賑災，越來越有經驗，從完全不懂，一切配合，到現在承擔協調與規劃；從不曾拿過大鍋鏟，不會包粽子，到現在什麼都不怕。因為藉事練心，也更確信

做慈濟讓自己的生命不虛此行。

鄉親關懷組井田音心剛走入慈濟滿心歡喜，單純想著可以做好事，可以助人，覺得可以做善事，是一種幸福，沒想到是一次的苦難的見證與學習。回想3・11時首次走入災區，目睹許多人的家鄉夷為平地，許多人家破人亡，無家可歸。人生從未有過那麼多次，從災難中去見識苦，學習到要把握當下，要珍惜所有。從灰衣到受證，一個人到帶著家人投入，現在妹妹、兒子、小姑也都走入慈濟，現在只要能夠做志工，就是幸福，就要感恩！

勝海仁是兒童中文班學生家長，曾在其他地方參加災區志工活動，但大多是進行清理、挖土之類的工作，這次能直接面對每一位受災民衆，傾聽他們的心聲，覺得是非常寶貴的經驗。

發放圓滿，東京志工準備回程，和本地志工們互道感恩，期待再相會。

靜思

祈福感恩會 日本分會

揮別震驚辭舊歲 喜迎平安福氣年

撰文／陳雅琴

走過「震」動不安的二〇二四，我們以歡喜感恩心，迎接新歲。日本分會一月十九日舉辦「祈福感恩會」，活動後也設計攻站集章活動，接引會眾，透過體驗認識慈濟人文。



■ 執行團隊代表上人發給志工福慧紅包。攝影／水谷瑞芳

人人有功能 分組不分心

活動組從事前的規劃到執行，中間透過不斷的會議討論後定案，更要在每一次的練習中陪伴。佈置組落實環保，利用日本新年家庭佈置的花材，搭配年節花卉，會場內外歡樂喜慶氣氛滿滿，迎接前來的會眾，佈置組更是用心巧妙的設計一朵花，代替心香一束，以心香花香供養佛。

以食輪轉法輪的香積組，廚房裏忙碌的身影，從挑選食材到人數的確認，分工合作完成各項食材的前置，經過煎、煮、炒、炸後，成為一道道美味佳餚。總務組依據各組事前所提出的需求提供物資，大到桌椅，小到電池，及事後的整理歸位，為下一次的活動做準備。

人文真善美，從事前及當日的拍攝錄影，到事後的挑燈夜戰，留下一個又一個的記錄。靜思茶道高齡志工張好，連續多日手工製作茶食到深夜，不僅造型「柿柿如意」，餡料豐富又養

生。入經藏組在年末最繁忙的時期排除萬難集合練習，更在年假過後，歸隊練習再練習。

見證與分享 喜見菩提林

慈青謝玉潔，3・11時還是留學生，去年能登賑災見舞金發放時承擔行政窗口，進而培訓受證，玉潔分享目前三十七歲，可是有一半人生在海外，也有一半的人生，都在慈濟。

慈青王譽秦，跟著父母親的腳步，一同走在慈濟路上，她表示：其實她想要代替爸爸媽媽，跟大家說一聲感恩，因為剛來日本時，她跟媽媽日文都不好，但有數不清的師姑陪伴媽媽去做各種不同的事，包含她自己現在有辦法說日文，要歸功於當時慈青的學長姐們陪著她讓她不孤單，即使遇到困難，也有一個可以避風的地方。

【福慧紅包】最受期待，由執行團隊代表證嚴上人轉達感恩及祝福，每個紅包都有一句靜思

語，祝福大家平安喜樂。

人間大藏經 你我他身影

二〇二四年慈濟大藏經影片，看到許多國際間重大事件，及慈濟人在各地持續進行的救援活動，日本分會大藏經，看到日本志工一年來的足跡。

駐日代表處僑務組副組長李承芸分享，看到慈濟不管是去年或者是一直以來，對海外的援助，或者是在國內災害的協助，都非常的感動，深深覺得一個人的力量是有限的，但是通過慈濟這樣子的組織，大家善心愛心的能量很大，這並不是金錢能夠衡量的。在觀看影片時，她也不自

■ 1 植野真由美(右二)帶著先生(右三)前來參加，都表示感動於慈濟對受災者的用心。攝影／水谷瑞芳

■ 2 駐日代表處僑務組副組長李承芸分享，深深覺得一個人的力量是有限的，要大家一起來共善，增加力量。攝影／李月鳳

覺地一直流淚。

臺灣新聞社社長錢妙玲表示，長期以來知道慈濟在為全世界付出，雖然過去一直沒有很深入的參加，但今天特別感動的是，看到在能登半島的震災之後，慈濟真的做到臺灣人的大愛精神。希望以後有機會的話參加。同時，「更應該把我們慈濟的愛，讓各地區的人去了解。」

一人造一福 送愛要即時

植野真由美表示：慈濟的大愛，充滿了她的心，說著不禁潸然落淚。「慈濟人真的很有愛心，不是只說說而已，光是看影片，就感到非常溫暖的」。她希望往後也能盡自己的能力，去參與志工活動。

植野先生第一次參加活動。「看到如此大規模的活動，感到非常驚訝。看到慈濟人對活動的用心，及為有需要的人發放」他說，在受災的人面臨到生死存亡的時刻，慈濟人即時提供

需要，讓他非常感動。

僑務委員林月里表示，她原本只知道慈濟是一個慈善團體，大概有三十年了。今天最大的感想是，「如果加入這個溫馨、非常有意義的團體，這個善良的花朵應該會開得更大。」

百草園社區會眾川端桂美代女士表示，沒有認識慈濟前，實在不相信這裡是佛教的世界，雖然自己是佛教徒，但今天透過影片看到慈濟人的活動，感受到大家真的是充滿了善心。「現代人啊，都是只顧自己比較多，但看到那麼多的災難，大家都去幫忙，就很感動。」

證嚴上人新年的祝福：「正念勤修學與覺，精進力行菩薩道。」希望大家心念單純，學習佛陀的智慧，勤實踐，方能見苦知福，一人多造一點福，人間就有無量福。在新的一年裡，期待人人從自心開始改變，如素護生，保護大地，才能早日消弭災難。



祈福感恩會 人文教室

力行菩薩道 人文體驗攤位

撰文 / 黃韻璇

志工藤本裕子與團隊承擔會場總佈置的工作，忙碌了好幾天。「靜思花道」人文體驗用的花器，是回收的寶特瓶。她分享，「志工們去賑災時，就算物資有限，也希望用花香芬芳慰撫災民的心，用隨手可得回收物資的花器配上花材，也能展現靜思惜物的人文」，再搭配當季的花材，就能呈現出真善美的意境。

人文教室的教師團隊幾乎全員出動，集思廣益，當天企劃的剪紙體驗老少咸宜，一時間大家都專注的沈浸在剪紙世界，久久不離去！老師們還貼心地準備好相框，讓會眾能將完成的作品帶回家做紀念。

今年日本的新福感恩會分成典禮及人文體驗攤位兩大部分。人文體驗的內容，結合日本分會目前的活動，如抄經班、人文教室、生活環保、慈濟青年、慈濟防災智慧、靜思花道、生涯學習等七大主題，設計攻站集「福」卡抽獎活動，讓會眾參加完典禮後，都留下來認識慈濟的美與善，也為社區菩薩大招生鋪路。

插花剪紙 惜福愛物福氣多

人文教室老師徐麗霞，看到許多會眾跟志工們彼此溫暖的問候，讓首次參與活動的她，感受到慈濟大家庭強大的凝聚力。趁著空檔，也參加了祈福感恩典禮，回顧了全球慈濟與日本慈濟，在過去一年的足跡，在影片

中感受到慈濟人無私奉獻的精神，以及愛與汗水堆疊而成的不凡成就。那一幕幕真摯的情感流露，讓臺下的她不禁流下眼淚。

慈濟的防災七寶展示，除了「福慧隔屏」及「福慧床」、「福慧桌椅組」及「環保毛毯」外，還有今年的新產品「福慧收納櫃」，及「福慧蚊帳」。貴賓與會眾在志工們的介紹下，深深體會到證嚴上人的智慧及慈悲。

承擔導覽志工的陳佩思來自新加坡，覺得有使命將每一件福慧防災系列的製作和功能，傳達給每一位來參觀的人，非常用心地先用英文寫成筆記，再用中



■ 人文教室提供的剪紙體驗，老少咸宜。攝影/水谷瑞芳

文把重點寫在手機上，常常閱讀暗記。

慈濟人走入社區發揮愛心造福人群，集福立德，讓社會的暗角充滿溫暖。以戒慎虔誠之心迎接未來這一年，平安就是福，祈願新的一年是平安吉祥福慧年。



關西祈福感恩會

美善愛循環

撰文 / 王孟專 · 陳靜慧



■ 通圓法師(左)與大阪市議會石川博紀議員(右)，把握因緣互動。攝影/葉文楷

二月二十三日關西地區慈濟祈福感恩會活動，除了致贈證嚴法師的福慧紅包，播放全球大藏經與日本分會大藏經，讓來賓了解去年一整年的慈濟足跡。今年也首次在活動中帶領《無量義經》梵唄的經文唱誦，活動後茶會時段，設置三個小站，要讓與會來賓有視覺、美食與心靈的滿滿饗宴。

百變巧思 歡喜迎嘉賓

天氣寒冷中迎接祈福感恩會，志工們分工合作。前一日布置組百變巧思，搬出倉庫裡的屏風、花瓶，再以鮮花、年節飾品，會場頓時喜氣又莊嚴。音控志工與司儀接連一日，進行最後彩排。當天一早總務與機動組志工，合心齊力進行最後的準備工作。

香積志工抱著「就是想暖暖大家的胃」的貼心，前一天就採買備料，在家配料切菜。一

早，志工們便在狹小的廚房空間裏忙進忙出。從臺灣來支援的香積達人林宜靜等志工，特別帶來了配料，製作了可口的蘿蔔糕、紅麴米糕及各式甜點。能在日本品嚐到臺灣的家鄉味，遊子們特別感恩！吃在嘴裡暖在心裡。

關西組長分享，除了這些安排以外，「今天現場還有義賣能登的米！去年九月的水害，慈濟志工前往協助搶救農家收割稻米，當地的農家為表示感謝慈濟之意，寄來了能登稻米。拿到這個米，我們覺得，應該要拿出來義賣。」稻米，傳達來自災區的愛，讓愛循環，更具意義！

首次參加 感恩與感動

大阪市議會石川博紀議員去年曾經到臺灣參訪慈濟的防災體制，留下深刻印象，第一次參加慈濟的活動。他致詞時表示，看到慈濟在能登救災、發放見舞金、物資的影片，讓他內心充滿



■ 經過志工的說明，老闆也捐出善款一起共善。攝影/姚春紅

群馬社區茶會環保

善的效應 愛心化清流

撰文／姚春紅

感動！會後茶會時參觀防災、救災物資的介紹時，非常地讚歎慈濟，「默默為日本做那麼多，自己都不知道！很是慚愧！」

日本分會執行長許麗香致詞感恩與會來賓，「正是因為有這麼多人支持，才能走到今天。今年，我們是慈濟創立五十週年，而日本分會二十四週年。有大家的共同參與，對我們來說是最大的力量。」

來自大陸的通圖法師專程蒞臨，定居於京都的知恩寺，曾多次參加慈濟活動。法師用流利的日語致詞：「現在，我的內心仍然無比激動，能夠遇見這樣的慈濟，以及證嚴法師的教誨，對於我這位出家人來說，這是我人生中最寶貴的財富。」法師還謙虛地說「今後也請多多關照。」

臺北駐大阪經濟文化辦事處中僑務課黃麗婷代表前來，她雖是第一次參加活動，但對慈濟

並不陌生，致詞時說：「感謝慈濟人都能協助政府急難救助的案。我剛看了影片以後非常的感動，只要有需要的地方，慈濟人都勇往直前，不顧任何的辛勞。除了人力、物力的支援之外，在人心的撫慰這方面，其實是我感動的一件事情。」「因為有此，也相信良善的循環會一直下去。」

竹筒精神 小善聚大愛

茶會休息區，有多位會眾也表示是第一次來參加。透過這樣茶敘交流，願把大家慈悲的善心與善行更加凝聚在一起！會眾入佐芳登分享看到慈濟「為鄉親發見舞金，看了很感動。我知道慈濟是NGO慈善團體機構，全球有災難慈濟總是會付諸行動，付出無所求。」所以今天他想要來表達對慈濟的感謝。

也是第一次參加的岡本元子是大阪枚方市社區素食料理教

室的學員。她說：「當看到影片播放年度報導，慈濟付出無所求的理念，給人很大啟示，今日災難重重，感觸深刻，如果今天換在自己的立場時，一定會心慌意亂不安。」還說，「我雖不是很富有，但也能盡一點微薄之力。每次去枚方社區料理教室，我都會在給付箱投一點小錢來感謝！」她覺得此次來參與祈福感恩會，受益良多。

許小雅今天帶著小孩前來，第二次來參加「參加活動的感覺，讓我覺得很溫馨，然後，也看到慈濟大家這麼的努力。」所以之後還是會繼續帶小朋友來參加這個活動！因



■ 中華總會林學謙事務局長，在簽到處代表該局捐出善款。攝影/葉文楷

為，「來這裡，有回家的感覺！」

慈濟也是大家的家，能付出愛的人，就是志工！只要人人盡微光的己力，就能一起守護這個天下大家庭！

二〇二五年二月初，群馬志工姚春紅與組長半田蓮美商談，邀約身邊的朋友一起從自身做起回收鋁罐，並將鋁罐變賣所得捐給慈濟分會做善事。

證嚴上人說：「行善不是有錢人的專利，只要有心，付出一點點力量，與其他人的愛心匯聚起來，就可以幫助許多貧病飢餓的人。」

垃圾變黃金 黃金變愛心

三月，陸續陸續收到朋友們捐出的鋁罐。二十一日，第一次變賣鋁罐的收入雖然不多，但積少成多，一點一點累積，終將匯聚成更大的善行。

一位回收站的老闆太安良平（中國名字：王磊）也是華人，當他得知我們是慈濟志工，並且賣出的款項將全數捐給岩手縣火災區時，他感動地說，也想出一份力來幫助有

需要的人。於是他拿出一桶需要清理的硬幣，詢問志工們：「這些可以捐嗎？」志工回答：「我們會盡力清洗，真的很感恩您的付出！」隨後，志工們與他聊到慈濟慈善基金會的工作內容時，老闆更是當場請妻子再捐出一筆善款，讓大家深受感動。

原來，家中不起眼的鋁罐，若隨手丟棄就是垃圾；但若加以回收，就能變成黃金，進而轉化為愛心。這份愛心將化為涓涓清流，環繞全球。群馬志工們將持續回收鋁罐，以行動淨化人心，共同為世界帶來更多溫暖與希望。

分享慈濟路 妙法治煩惱

三月十二日這天，群馬志工舉辦聯誼會。由志工張秀民承擔任司儀，她分享證嚴上人告訴我們「歡喜做才會有福報，能善解他人就是有智慧」，因



大阪小學生 馳援臺灣地震

撰文/施燕芬·陳靜慧 攝影/中村瓊珠

臺灣與日本都是地震頻繁的國家，防災教育需要從小紮根。日本大阪府泉大津市的浜小學，近年來針對五年級生進行「防災教育」學習，也是該校的特色課程。最近也與臺灣嘉義縣的雙溪小學、雲林縣石龜國小，有多次的互相參訪與線上交流，相互汲取經驗。擔任課程指導的是關西大學社會安全學部城下英行副教授，曾經到臺灣訪問研究，也是在他的牽線下促成了這個跨國防災交流。

洪處長又回溯一九九九年臺灣中部大地震時，受到日本政府的急難救援大隊的全力支援。所以，二〇一一年發生3.11

七月四日浜小學師生一行，前往大阪辦事處拜會，並與慈濟志工相見歡，之後進行捐贈儀式。洪英傑處長致詞時，感謝浜小學的師生，「募集全校的愛心馳援臺灣，也感謝城下老師熱心地居中協調，促成泉大津市浜小學的『赤子之愛，跨海變大愛』」。

去年，四月三日臺灣花蓮發生了大地震後，浜小學兒童會關心臺灣的好朋友們，發動愛心捐款，希望馳援臺灣。活動後原本要透過駐大阪經濟文化辦事處轉交善款，因為已經超過了接受募款的期限，最後，與校方討論後決定轉為捐贈慈濟。

心繫好朋友 愛援花蓮地震

為善解使我們的心很自在，做慈濟事就是要這 福慧雙修。

接著人人分享自己的志工心路。群馬協力組長半田蓮美分享進入慈濟後，運用上人教導的智慧，化解孩子跟先生之間矛盾。

姚春紅分享自己是從在中國時就加入慈濟，自己有很大的改變。到日本後回歸家庭當主婦，曾經因家庭瑣事產生抱怨，甚至有產後憂鬱症，有一天跟先生吵架竟想不開要結束自己的生命。還好有因緣在日本又加入慈濟，發願一定要受證當委員。

黃碧慧分享自己用妙法應對起煩惱心的會員，只想維持這位師姊的菩提心，過程逗趣，引起全場大笑！林瑪莉分享一開始有人邀請她做「香積」，以為香積是有雞腿可吃。最後才知道香積是要承擔

做飯的意思，又是引起哄堂大笑的寶貴經驗。從不敢做到勇猛承擔，後來在能登賑災發放時煮熱食，居然可以做出二百多人的料理。

有心就不遠 心善結好緣

黃杏玟分享培訓路上曾經想放棄，覺得自己年紀大，還有到東京路途遙遠，沒有信心。但在今年參加祈福感恩會上聽到慈濟歌曲歌詞的「普天下沒我不愛的人，普天之下沒有我不原諒的人」時，想到自己跟妹妹間矛盾，深深觸動內心。心想「對啊，要聽上人的話。自己的妹妹有什麼不可原諒」，所以祈福感恩會結束後主動找妹妹和好，並且發願繼續參加培訓。

賴綉美分享自己曾因大意把五百萬日元當垃圾丟棄，心結一直打不開。這次參加聯誼會很開心。聽說有鉛罐資源回

收，今日也有帶來。願意繼續收集盡一分力。

飯島純子分享自己平日去寺院做義工、也常常誦經，看到慈濟與其他宗教不同，看到志工們到能登災區付出，真的很感動，所以若有機緣也願意做志工。

佟秀慧分享自己在國內曾經是一名教師，若群馬有中文

班可承擔教師協助上課，同時也希望自己孩子學中文。肖遙第一次參加這樣的活動覺得很開心，「素食很好吃！」下次也想參加。

最後由姚春紅帶動手語《一家人》歌聲響起大家一起伸出手，用心的，歡喜地比出一家人的感覺，再見聲中圓滿了聯誼會。



■ 志工收集了來自會員們家裡的環保物資，大家齊為環保進心力。
攝影/林瑪莉



大船渡森林火災 災害の調査と事前準備

14 年後、今度は森林火災により家屋が準半壊以上の損害を受けた住民へ世帯人数に応じて 10 万円、15 万円、20 万円を支給し、少しでも急を凌げればと、再び大船渡市へ足を踏み入れました。

※大船渡林野火災支援状況は P10 の図を参照。

森林火災見舞金配布 再び大船渡へ

訳 / 真鍋誠 編輯 / 雙月刊小組 (文稿提供 / 林玲俐、吳惠珍、朱家立、洪秀瑩、許麗香、陳靜慧)

岩手県大船渡市赤崎町地区で二月二十六日に発生した森林火災は、乾燥と強風に煽られ火勢は六日経つても衰えず、四千三百人余りが避難を余儀なくされました。これは日本において、ここ三十年来最も深刻な森林火災でした。

この森林火災は三月五日と六日、二日続いた降雨により延焼が収まり、翌週三月十日、大船渡市はこの大火災が鎮圧されたとして避難解除を宣告しました。この通達を受け避難していた人々は家々に帰って行きました。しかし、三月十五日現在、役所の家屋損失統計ではこの火災で百二棟が焼失、帰る家を失った百人の人が避難生活を続けていました。

愛を持って 私達は再び来ました

岩手県大船渡市は日本の東北に位置しています。距離にして東

京日本分会から約五五〇キロ、車での所要時間は約七時間です。今から十四年前、3・11 東日本大地震発生後、慈濟ボランティアは三月下旬に第一回の物資支援を行いました。あの時、最初に赴いたのが岩手県大船渡市でした。避難所の人達にアルファ米、毛布、マフラー、下着とナッツの詰め合わせを贈りました。そして二〇一一年八月、再度、大船渡市訪れ地震によつて家屋が半壊以上の損害を受けた三千三百五十五棟の住民に見舞金を支給しました。

見舞金の準備を至急行つ

見舞金支給の準備の時、至る所に「感謝、尊重、愛」が見られました。八十二歳と高齢のボランティアであり、茶道の先生でもある張好さんは縁を大事にしています。いつも得意のお茶と自作のお菓子が被災者の皆さんと縁を結びます。浄斯産品のアサ

東北大地震時、臺灣政府以報恩之心回饋日本的受災鄉親，慈濟人更是走到最前做到最後，陪伴鄉親撫慰他們受傷的心靈。

善的循環 謝謝臺灣

城下老師告訴孩子們，一百萬日圓的愛心捐款，與其讓一個人全額佈施，不如由一百萬個人平均付出一圓日幣來得更為重要」。慈濟的做法是聚集更多有愛心的人，關懷需要被關懷的人。

浜小學的兒童會代表五位同學，在校方老師以及城下教授的陪伴下，大方地自我介紹。簡單交流後，進行捐贈儀式。遞贈「目錄」和「捐款金額」前，由一位學生代表大聲朗讀以毛筆寫上主旨與金額的「目錄」，再連同放入「義援金」的信封袋，正式遞交給慈濟，由志工陳靜慧代表接受。

志工準備「平安」吊飾給孩子們做紀念，並說明「它除了當可愛的吊飾，也可以當護身符哦！」同學們聽完後都露出笑容，欣然接受。幾乎每一位學生都表示，臺灣人經常支援日本，所以「身為日本人的我們，也願意幫助臺灣」、「希望這份友情能夠長長久久，一直持續下去」。

心繫好朋友 愛援 0121 地震

氣候變遷下，全球各地災害頻傳。今年一月二十一日，臺灣嘉義、臺南地區再次發生大地震。這次，浜小學的學生們，一樣心繫他們住在臺灣的好朋友，發起募款活動，要愛援臺灣。孩子們利用下課後的時間，站在校園募款，果然還是熱烈響應。活動後，兒童會決定要再將善款再交給慈濟。

收到校長西尾光弘的聯絡

後，三月七日志工前往學校拜訪，在校長陪伴下，兒童會的五位學生代表下課後來到會客室。

儀式簡單輕鬆，雙方簡單自我介紹後，大阪志工陳靜慧代表接受善款，這次是放在牛皮紙袋裡，沈甸甸的大小銅板與紙幣，是孩子們利用放學時間，站在校園不畏寒風，募來的「重重的」愛心。

志工回贈結緣小禮物有福慧珍粥，並說明吃完了以後，「可以當存錢筒，存下愛心，之後還可以再助人喔！」，另外也贈送大愛感恩科技的環保筆，「環保筆是用臺灣的環保志工回收後的保特瓶製作的，猜猜看一支筆要用幾個瓶子？」有孩子說「五個」、「二十個」……當聽到答案是一個時，都露出了驚訝的表情。「防災教育很重要，環保回收就是防災行動的一種喔！對不對？」孩子們都點頭認同。

西尾校長對孩子們補充說明：「慈濟是來自臺灣一個很大的國際性組織，在全世界很多國家都有賑災的行動。去年的能登地震後，慈濟志工也有到能登去支援喔！」

「防災教育」是該校的特色課程，因此，這天志工也特別準備介紹慈濟防災賑災物資福慧隔屏、福慧桌椅等七寶物資的資料與圖片，提供給西尾校長參考。

離去前，志工與孩子們圍成小圈圈交流。「你們捐出來的錢，是自己的零用錢嗎？還是跟爸媽拿的？」「是用我們自己的零用錢！」「你們真的好棒啊！小小的年紀就這麼有愛心，真是了不起！」孩子們，臉上的笑容，卻是停不下來！





■ 大槌町議会議員の山崎充さんはいち早くお手伝い。写真 / 朱家立



■ 現地にて「番号案内システム」をセットする。写真 / 吳恵珍



2



1

- 1. 大船渡に持っていく資材を準備するボランティア。写真 / 吳恵珍
- 2. 見舞金支給工程について予行演習を行うボランティア達。写真 / 吳恵珍
- 3. 大船渡にと説いた物資を降ろす作業をするボランティア達。写真 / 朱家立



3

ムギ粉、この三品を加えた茶菓子は非常に栄養があり、美味しくて沢山食べても飽きることはありません。

見舞金の封筒制作を担当したボランティアは、紙の選び方、紙の裁断には非常に注意を払いました。被災地の皆様がこの手作りの封筒を受け取ったとき温かさを感じてもらえたらと思いつつ作成しました。紙の裁断時にはもし切り間違ってしまったら、一枚百円以上する紙を無駄にしてしまうのではないかと、細心の注意をしながら製作していました。

慈青の李彦霏さんは「紙を切るその全ての過程においては細心の注意を払い、最上の物を作ろうと心掛けました。各工程では心を込めて念仏を唱え、被災者の皆様がこの封筒を受取った時、私たちの真心を感じ取ってくれるようにと心を込めて祈りました」と話していました。ボランティア

は各自の作業を理解し精魂込め作業し、この真心が被災者の皆様の心に伝わる事を祈っていました。

各組が準備を進めました。総務組は温かい食べ物や支給時に使う道具を、寄り添い組はリーフレットや縁結びの品を箱に詰めました。行政組は使用する大型バスの手配に路線確認、宿泊先等細部にわたって確認をしました。

支給組の事前打ち合わせでは見舞金支給の流れの説明、「番号案内システム」の動作説明が行われました。被災者寄り添い組はお互いに携帯電話の録音アプリの有無を確認し、この活動を記録に残せる様に間違いなく動作する事を確認しました。この時、若いボランティアは年長のボランティアに録音の操作方法を丁寧に教えていました。見舞金支給の戸数は多くは有りませんが、誰

もが細心の注意を払い、綿密に計画し、支給工程に於いては一つひとつ説明し予行演習も行いました。

大船渡へ 私たちは再び来ました

四月四日、陳金発さんを団長とする二十三人のボランティアは新幹線に乗って仙台へ、仙台到着後、ワンボックスカーに乗り換え見舞金支給会場へと向いました。会場となる「三陸公民館」に到着後、さっそく準備を始めました。東京からの物資運搬車も到着し、お互い協力し合い物資を搬入し、それぞれ手分けして各作業担当組の予定位置へ運び、見舞金支給組は直ぐに「番号案内システム」のテストし設置しました。

全体の作業が一段落したところで、許麗香執行長と数人のボランティアが茶菓子を持って会館の職員を訪問しました。「この手

作りのお菓子、これは遠くから温かさや友情を運んで来ました」ととお渡しすると、職員の方々は口々に「とても美味しいです」とおっしゃってくれました。

今回の支援活動では初めて見舞金支給と炊き出しを同時に行いました。担当するボランティアは現地に到着後、直ぐに地元のスーパー Moya へ行き、地元の新鮮な野菜を使って素食料理を作る準備をしました。それは被災者の皆様の心の中に温かさを提供しました。

東北の大槌町にお住まいで大槌町議会の議員でもある山崎充さんは手伝いのため一歩初めに会場に来られました。3・11のとき見舞金を受け取った縁で慈濟を知り、ボランティア活動にも数多く参加されており。現在は慈濟が主催する大槌町の新芽奨学金支給の活動にも参加されています。

「絆」は「拉長情(長きに亘る愛)」愛の種子です

日本分會行政主任の陳思道さんは3・11の時は会社員で、休暇を取って、何度も東北へ赴きました。今回の災害支援活動でも見舞金支給の協調組を担当しました。問い：今回と以前の支援活動に違いはありますか？

思道さん：今回の活動ではより多くの被災者の皆さんと一緒に時間を共にするようにしたいので、見舞金支給の計画、内容及び人員配置はこれに沿って考えています。これは去年の能登災害支援活動の経験に基づいたものです。あの時、若いボランティアと年配のボランティアには違った長所が有る事が分かりました。この長所と長所を合わせ大きな力にしたいと思いました。いまでも私たちは被災者の方々が見舞金の受け取りを待っている時、温かい食事や、温かいお茶を差し上げ



■ 早朝より始まった見舞金配布の状況を現地メディアが取材。写真 / 吳惠珍

大船渡林野火災支援（一日目）

訳 / 岩村益典

編輯 / 雙月刊小組（文稿提供 / 林玲俐、吳惠珍、朱家立、洪秀瑩、許麗香、陳靜慧）

愛とともに歩む
灰燼からの夜明け

たことはありませんでした。それは災害支援活動の時、重点は災害であり、災害見舞金を支給する事だからです。あの時、災害に遭った家屋は千、万を上回っていたかもしれない。今回はそうまで多くは有りません。ですが同じ災害です。私たちは皆さんに寄り添い慰める必要があります。私は被災者の皆様と心をつなげ、互いに一緒になって時間を過ごし絆を更に深める事ができることを期待しました。

日本語の「絆」は一般的に中国語で「牽絆」と翻訳されます。この「牽絆」には束縛や足枷の意味もあります。しかし今回、

■ 1 八十二歳の張さんは得意の自作のお茶菓子を準備。写真 / 朱家立

■ 2 早朝より食材の下ごしらえを行うボランティア達。写真 / 朱家立

私を感じた「絆」には束縛も足枷はありません。それは親切で澄んだ清らかな感情であり、證嚴上人が私たちに告げられた「拉長情（長きに亘る愛）」の様です。

3・11を振り返って見ると、あのとき被災者の皆さんとどういった縁が結べるのか、どの様な援助が出来るのか、それをはつきりと答えることはできませんでした。全世界から愛の心を持って行きました。使命感もありました。しかし、東北に足を踏み入れ、これからどうやって活動すれば良いのかは分かりませんでした。唯一分かっていたのは被災者の方々に「愛心」を伝える事、多くの人々に私たちがより寄り添っている事を感じてもらう事でした。

ボランティアは愛の種子です。その種子は十四年前のあの時に植え付けられたかもしれませんが、それはいつ発芽するか分かりません。あの種子、それは今の現地ボランティアであつたり、新聞社の人であつたりします。彼らには十四年前、慈済が災害支援に駆けつけた事、それが深く脳裏に焼きついてます。ほんの少しの愛、それが彼らの心の中に留まっています。そして今回の活動に苦難があつた時、彼らが彼女らが自主的に駆けつけ、私たちを助けてくれたのです。

十数年を経て、再び大船渡の土地に足を踏み入れました。ここにはあの「絆」の種子がありました。それは「拉長情」です。愛の種子は成長し続け、そして成就しました。そこにはボランティア達すべての「感恩（感謝の気持ち）」がありました。



大船渡市の森林火災見舞金の配布初日、ボランティアは食事と温かいお茶の香りで被災者の心を癒やそうとしました。安全な甫嶺復興交流推進センターで、早朝からボランティアは米を研ぎ、お茶を入れ始めました。淨斯翠玉烏龍茶を使い、茶を醒まし、丁寧に淹れ、まろやかな味わいに仕上げました。

配布現場で思いやりの実践

早朝から配布会場には報道陣が集まり、皆の心は一つ、それは愛のためでした。大船渡市長の洲上清氏も特別にボランティアを訪ね感謝を述べ、執行長の許麗香が市長に配布の手順を説明し、証嚴上人からの被災者へのお見舞い状を紹介しました。市長は「先ほど二〇一一年の東日本大震災の時と同様に、慈済に支援をいただき、ボランティアの方々の熱意を深く感じています」と述べました。

東海新報編集局の佐藤壮記者は、慈済の見舞金配布について何度も記事を書き続けており、「十四年前、避難所で慈済と被災者との交流を目の当たりにし、この支援団体について報道しようと決意しました。当時、被災者は支援に条件があるのではと警戒していました。皆さんは二〇一一年の時、何も求めず支援を行い、それが人々を驚かせました。十四年経った今、政府からの現金支援がまだない中、皆さんが再び手を差し伸べてくださり、これが被災者への最も直接的な支援となっています」と語り、慈済の温かい思いやりに触れ、日本人の台湾に対する親近感も増したと付け加えました。

被災しても前を向いて

最初に見舞金を受け取った千葉さんは「こんなに早く現金をいただけるとは思わなかった、本当に感動しています」と述べまし



■ 1. 東北の現地ボランティアが配布用エコ毛布をセッとする。写真 / 洪秀瑩
 ■ 2. 被災者の柚野さんが被災現場を案内してくれました。写真 / 朱家立
 ■ 3. 被災者女性に寄り添いケアをするボランティア。写真 / 吳惠珍

た。古内おばあさんは見舞金を受け取る際、深く感動してボランティアに礼を述べました。体の冷えていたおばあさんの手をボランティアが温めると、おばあさんは暖かいと喜びました。

志田勝芳さんは、五人家族で四世代が避難所で暮らしており、全壊した家を再建する余力がありません。3・11の地震では家が半壊し、通知を受けられなかったため見舞金を受け取れませんでした。今回は現金と毛布を頂き、深く感謝していました。容赦ない自然災害に対して、多くの被災者が前向きな姿勢を見

せています。一軒の家を焼失した方は「被災しても前を向いて生きていきます」と話し、またある被災者は「生活を一からやり直す事になっても、命が無事なことが一番大切です」と語りました。

僑本さんと米澤さんは元々親しい友人でしたが、連絡が途絶

えていました。今日、配布会場の駐車場で偶然再会し、喜びの涙を流しました。二人は今回の火災による心境を語り合い、全てを失ったのは事実だが、これは天災であり、考えても仕方がない、むしろ前向きに生きていこうと話しました。仏典の教えによれば、この世の財産は五つの家（政府、盗賊、火災、透垣、不肖の子孫）に共有され、天災が来れば何も持ち出せません。地水火風、この世のものは永遠に私たちのものではないのです。このお二人の態度に、ボランティアは深く感銘を受けました。

「エコ毛布とショール」は世界からの愛

エコ毛布はペットボトルをリサイクルして作られ、物を再生させながら慈善支援活動に役立て、善行は世界中に広がっています。高齢者や障害者への配慮として、エコショールも用意し、温かさ

保護を提供したいと考えました。見舞金配布会場では、エコ毛布とショールも同時に配布し、全てを失った被災者へ即座の愛と思いやりを届けられるよう願いました。

心温まる温かい食事とお茶

ボランティアが手作りの温かい食事を共に食べ、被災者の胃と心を愛で温めました。

袖野さんにも二度目の被災者で、3・11では家が全壊しました。七年かけてようやく再建が完成に近づき、最近では子供も大きくなり、家の隣に増築も予定していましたが、完成前に山火事で灰燼に帰しました。彼はボランティアに「見舞金をいただいたら、農

泉恵さんはメディアで配布の情報を知りましたが、「このような団体が見舞金を配布するなんて信じられず、半信半疑で子供を連れて来ました」と言い、見舞金を受け取った後、子供に背を向け、ボランティアの肩に寄りかかっ涙を流しました。火災後、何も持たずに子供と避難所で生活し、子供の将来を心配していましたが、自分を奮い立たせていました。そのストレスがついにこの時に解放されたのです。ボランティアは「思っ存分泣いていいですよ」と声をかけました。

地元ボランティアの芽生え

3・11津波の後、慈濟は十回に渡って見舞金を配布し、地

域でお茶会や感謝会を続けてきました。今回の支援チーム七十人のうち、東北各地から二十人以上の地元ボランティアが参加しています。様々な地域から集まった地元ボランティアは、到着後すぐに各担当に加わり、力を尽くし、被災者が被災者を助け合う形で、互いに支え合いました。ボランティア達は、一杯のお茶、一切れのお菓子、そして耳を傾け傾聴することで寄り添いを始めました。

気仙沼市職員の吉田瞳さんは、3・11の津波の際に慈濟の配布活動を手伝いました。夫の吉田充さんも今日、見舞金配布を手伝っています。慈濟ボランティアの願いと行動に深く感動し、再び立ち上がる力を見出しました。

片山月江さんは「十数年前、皆さんの助けがあったからこそ、今の私たちがいます。あの時の



■ 4 気仙沼市職員の吉田瞳さん（左一）は今回も手伝いに駆けつけてくれました。写真 / 吳惠珍
 ■ 5 現地ボランティア平山睦子さん（左）は配膳のお手伝い。写真 / 朱家立



■ 一番目の見舞金受け取り者に気仙沼市役所の吉田充（右一）が最初の支援。写真 / 朱家立

大船渡賑災（二日目）

愛で繋がる絆 不思議な縁

訳 / 岩村益典

編輯 / 雙月刊小組（文稿提供 / 林玲惻、吳惠珍、朱家立、

洪秀瑩、許麗香、陳靜慧）

者を慰める活動に参加しました。陸前高田市出身で3・11の被災者でもある彼は「慈濟から大きな支援をいただいたので、今度は私が手伝いに来ました」と語りました。

及川栄勝さんは3・11の被災者で、慈濟石巻共修所でよく手伝いをしています。3・11の時に見舞金を受け取った後、翌年に日本支部に寄付を行い、初めて慈濟ボランティアから「竹筒歲月」の縁について聞きました。彼は深く感動し、日々の善行を決意しました。彼は「毎晩寝る前に小銭を竹筒に入れ、カレンダーに『X』を付けています。時々忘れることもありすが、その時は数枚の小銭を入れて大きな『X』を付けています」と実践を始めました。善行は小さくても行うべきという教えが、彼の最大の収穫となりました。

地域との連携 良きパートナー

3・11の地震の際、新潟から来た相羽利子さんは一度も欠かさず参加しています。彼女と慈濟との縁は、陸前高田市での見舞金配布時に、ボランティアたちが日本語が流暢でなくても全力を尽くす姿に感銘を受けたことから始まりました。それ以来、必要な時はいつでも車を運転して来訪し、慈濟ボランティアと会うて感謝と支持を表明しています。また、自身の責任感と使命感を持って、慈濟のために力を尽くし続けることを語っています。今野芳彦さんは3・11当時、大船渡市役所の課長で、慈濟の大船渡市での見舞金配布を支援しました。今回の山林火災での配布でも、被害状況の確認や地域との連絡調整を手伝っています。

小さな光が集まり 感謝の気持ち

初日の配布が無事に終わり、皆で地元ボランティアの話に耳を傾けました。日本支部の陳金発

ディレクターは感慨深げに次のように語りました。「この十四年間、東京のボランティアは、ほぼ毎年東北を訪れて支援を続けてきました。この長期的な大きな愛こそが証厳上人の教えであり、私たちは絶えず大愛を広げていきます」そして「二十数名の地元の方々が各地から集まり、相羽さんは新潟から七時間以上かけて大船渡まで来てくださいました。これは一時的な救援ではなく、大愛を広め、情を深め、愛を広げていくことなのです」と述べ、最後に、必ず前進し、これからも毎年東北への支援を続けていくことを励ましました。

3・11から今日まで、黒髪が白髪に変わったボランティアもいます。学生から会社員になった人もいます。十四年の間、東北への愛と約束は変わることなく、慈濟はずっとここにあり続けていくのです。



二度の被災 怨みを感謝に変えて

木村さん（仮名）は、津波と火災の二重被災者です。3・11の時、家が津波に流され、その場所に再建したものの、十三年後に火災に遭いました。また、大腸がん患者でもある彼女は、非常に前向きに「これほどの苦難を経験したのだから、乗り越えられないことはない」と語ります。「全てがゼロになり、箸一膳から生活をやり直さなければなりません。見舞金を受け取ったら、まず冷蔵庫を買い替えます」。不思議な縁で、彼女が受け取った静思語には「人生にはさまざまな困難が訪れますが、心を込めて向き合えば、どんな大きな困難も取るに足らないものとなります」と書かれていました。彼女は深く感銘を受け、まさに自分の人生そのものだと言ひ、この静思語をバッグに入れて、自分の力にしようとした決意をしました。



1



2



3



4

佐藤さんは漁業を営む一人暮らしの高齢者です。二人の娘がいます。次女は若いころの労災で障害者となり、現在は療養施設で生活しています。彼は肺癌を患っているが、娘のために死ぬわけにはいかないと、涙を流しながら語りました。「わずかな年金で生活するのは本当に大変で、どうしたらいいかわかりません」。遠方からの支援を受け、彼は大変温かい気持ちになり、ボランティアに何度も感謝の言葉を述べました。

東北の地元ボランティア愛の還流

陸前高田市の地元ボランティア佐々木善仁さんは、二日間連続で会場に手伝いに来ました。二日目には、ボランティアが彼の設立した施設「虹の子の家」を訪問しました。「この施設は不登校の自閉症児とその保護者に無料で開放されています。3・11の津波で、妻が家を離れることを拒んだ息子と共に亡くなり、佐々

木校長は妻の願いを引き継ぎ、退職金をすべてここに投じました。彼は慈済との縁について、多くの見舞金を受けた後、きちんと感謝の気持ちを表したいと常に思っていたと語ります。そのため、これまで慈済が東北に来る時には「必ず私にできる範囲で積極的に参加してきました」と語りました。

同じような思いを持つのが、二日間連続でボランティアを務めた岩鼻清一さんです。釜石高校の教師である彼と妻の奈美子さんは、3・11の被災者でした。岩鼻さんは十四年前の記憶をボランティアと共有しました。「突然、見舞金を贈りたいという仏教系の団体からはがきが届きました」。当時は様々な宗教団体から連絡があつたため、警戒心を持つていました。しかし、インターネットで調べた結果、慈済が国際的な組織だと分かり、受け取りに行くことを決めました。

当時は仕事の都合で、家族が代わりに受け取りに行きました。二年後、慈済は毎年被災地を訪れて皆の様子を気にかけているようだと言っていました。「ずっと気になっていたのは、直接お礼を言えていないことでした」と岩鼻先生は語り、「挨拶とお礼に行こうと決めたことが、慈済との縁のはじまりでした」。それ以来、「ボランティア活動を通じて、人々とのつながりがこつこつものだと実感しました。学校では学べないこと、教科書では学べないことを経験し、人生観が変わりました」。

「皆さんと接するたびに、先ほど話した『絆』を感じ、また皆さんがよく口にする『縁』という言葉を実感します」。それ以来、岩鼻先生と奥様は今日までボランティアとして活動が続けています。また、二〇一八年に慈済が大槌町で初めて新芽奨学金を配布した際には、岩鼻先生が司会を務めました。慈済の新芽奨学

機能グループは、若手、中堅、ベテランで構成され、伝承と革新を兼ね備え、互いの不足を補い合っています。

住民ケアグループの謝玉潔さんは、慈青（青年部）の学生から受證委員になりました。若く創造性があるため、時には世代間の違いを調整する必要があり、多くの課題に直面します。謝玉潔さんは、行動によって精神的に強くなり、責任逃れの言い訳をしなくなつたと語ります。最大の変化は、苦勞を厭わなくなり、進んで困難に立ち向かい、新しいことに挑戦するようになったことです。

今回の配布プロセスには新しい方法が導入され、財務配布担当の李浩溶さんが設計した現場の電子呼び出しシステムにより、異なる場所にいる人々も現在の呼び出し番号が分かるようになり、多くの人手を省く事ができました。

浩溶さんはプログラマーではありませんが、A-を活用してこのプログラムを作成し、毎日テストと改良を重ねて完成させました。

鍾佳玲さんは、3・11の時に慈青の先輩として、慈青の学生たちを率いて災害支援活動に参加しました。今回は調整役として、年配のボランティアの世話をしながら、若い人たちもサポートしています。グループチャットで細かな注意事項を発信し、全てのメッセージに目を配り、適時修正や補足を行っています。自身の注意喚起により、総務部門の臨時の買い出し回数を減らすことを目指しています。

以前の施美君さんは内気で声が小さかったですが、現在は管理業務を担当し、交通宿泊の細かな事務を受け持っています。必要な注意事項や伝えるべき事を勇気を持って発言できるようになり、若手ボランティアから団体の厳格

- 1. ボランティアの小野雅子が、被災者の佐藤さんの話を聞きケアをする。写真 / 朱家立
- 2. 現地ボランティアの佐々木善仁さん（中央左）は二日間も会場に手伝いに来て、更に自分が設立した「虹の子の家」も案内してくれた。写真 / 洪秀瑩
- 3. 現地ボランティアの岩鼻清一（左一）は14年前の思い出話を話してくれた。写真 / 朱家立
- 4. 李浩溶（右）が現地ボランティアの及川栄勝さん（左）に支給番号システムを教える。写真 / 吳惠珍



大阪の小学生からの台湾地震援助

浜小学校の児童会は台湾に地震が発生した時、愛の募金活動を立ち上げ『純粋な愛が海を越えて大きな愛に変わる』ことを実現した。

訳 / 吳俞輝 文 / 施燕芬・陳靜慧 写真 / 中村瓊珠



な管理者へと成長しました。

林真子副執行長は、家庭訪問で被災した住民の焼失した家屋の状況を目にし、彼らは強い心を持っているものの、見るに忍びないと、語りました。上人は私たちに彼の手足となり、目となることを求めましたが、今回私たちはそれを実現できませんでした。最も適切な慰めを提供できただけでなく、若い人々から整然と記録を残し足跡を残す方法も学びました。

蘇美菁副執行長は、今回調整グループを担当しました。彼女は3・11の時、年配のボランティアからお茶の出し方を教わり、何度何度度も繰り返しカップを洗い、まったく疲れを見せませんでした。一杯のお茶が住民達の心

■ 1 井田音心さん(右)は人助けは幸せだと語る。写真/朱家立
■ 2 勝海仁さんは(中)、今回の活動に参加して貴重な経験を待たと語った。写真/吳惠珍

を大きく動かしました。一杯のお茶の力に気づき、この団体が本当に特別だと実感しました。何度も災害支援に参加するうちに経験を積み、全く分らない状態から全面的な協力、そして現在は調整と計画を担当するまでになりました。大きな調理用しゃもじを持つたことがなく、粽を作れなかった状態でしたが、今では何も恐れませんが、状況を通じて心を鍛え、慈済の活動が自分の人生を意味あるものになっていると確信しています。

住民ケアグループの井田音心さんは、慈済に入った当初は喜びに満ち、単純に良いことをしたい、人を助けたい、善行を積むことは幸せだと考えていましたが、それが苦難を目撃し学ぶ経験の連続となることは予想していませんでした。3・11で初めて被災地に入った時、多くの人々の故郷が平地と化し、多くの人々が家族を失い、家を失う様子を目の当

たりにしました。人生でこれほど泣いたことはなく、災害を通じて苦しみを知り、今を大切に、全てを慈しむことを学びました。グレーの制服から認証を受け、一人で始めた活動から家族と共に参加するようになり、現在は妹や息子、義理の妹も慈済に参加しています。今ではボランティア活動ができることが幸せであり、感謝の気持ちでいっぱいです。

勝海仁さんは、子供向け中国語教室の生徒の保護者で、以前は他の場所で被災地でのボランティア活動に参加していましたが、主に清掃や土を掘る作業などでした。今回は被災者一人一人と直接向き合い、彼らの声に耳を傾けることができ、非常に貴重な経験となりました。

配布が無事に終了、東京と現地のボランティアが感謝の言葉を交わし、再会を約束しました。



台湾と日本はどちらも地震が多発する国であり、防災観念は幼い頃から根付かせる必要があります。日本、大阪府泉大津市にある浜小学校では、ここ数年、五年生を対象に「防災教育」を実施しており、これは同校の特色あるカリキュラムとなっています。

小学校の児童会は台湾の友達を心配し、愛の募金活動を立ち上げました。当初は大阪の台北駐在経済文化弁事処を通じて、寄付金を届ける予定でしたが、募金受付期限を過ぎていた為、学校と相談の上、慈済基金會への寄付に変更されました。

の3・11東北大地震では、台湾政府と慈済ボランティアが日本の被災地を支援し、心の傷を癒す為に尽力した事も語りました。

善の循環「ありがとう 台湾」

最近では、台湾嘉義県の雙溪小学校や雲林県の石龜國小との間で、度々相互訪問やオンライン交流を行い、互いに経験を学び合っています。この交流を指導するのは、関西大学社会安全学部の城下英行准教授で、台湾にも調査研究のために訪れたことがあります。城下准教授の仲介により、この国境を越えた防災交流が実現しました。

七月四日、浜小学校の教職員と児童が代表処を訪れ、慈済ボランティアと面会、その後、寄付の式典が行われました。洪英傑処長は、「学校全体で愛を集めて台湾に届けてくださったこと、そして城下先生が中心となつて泉大津市浜小学校の『純粋な愛が海を越えて大きな愛に変わる』ことを実現してくださったことに感謝します」と述べました。

城下先生は子どもたちに「百万円の寄付を一人で行うよりも、百万人が一円ずつ出す方が大切なことです」と伝えました。これは慈済の「多くの人々の善意を集め、支援を必要とする人々に届ける」という理念にも通じています。

心は友達とともに
花蓮地震への支援
一〇一三年四月三日に台湾、花蓮で大地震が発生した際、浜

洪処長はまた、一九九九年の台湾中部大地震の際に、日本政府の緊急救援隊が全力で支援してくれたことを振り返りました。その恩返しとして、二〇一一年

浜小学校の児童会の代表五名は、先生と城下先生に伴われ、自己紹介してから寄付の式典に臨みました。目録と寄付金を渡す前に、毛筆で書かれた目録をひとりの生徒が大きな声で読み上げ、封筒に入れた義援金とともに正式に慈済へ手渡しました。慈済ボランティアの陳靜慧氏が代表として受け取りました。

《 日 程 表 》

五月 May

◎東京23区 ◎関西地区

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3 憲法記念日
4 みどりの日 清掃活動 09:00-12:00 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00 大阪西成区炊き出し・夜回り 14:00-18:30	5 こどもの日 代々木炊き出し配布 9:30集合	6 振替休日	7 (読) 仏典系列 13:30-15:30	8 写経 13:30-15:30	9	10 料理教室 (尼崎) 10:00-17:00
11 灌仏会 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00	12	13 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30 楽しいミシン教室 (初心者) 10:00-15:00	14 (読) 仏典系列 13:30-15:30	15 写経 (甲子園) 13:30-15:30	16	17
18 ボランティア研修 9:00-17:00 ボランティア研修 9:00-17:00 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00	19 代々木炊き出し配布 9:30集合	20	21 (読経)《薬師経》※ 10:30-12:30 (読経)《薬師経》※ 10:30-12:30 (読) 仏典系列 13:30-15:30	22 写経 13:30-15:30	23 (読経)《慈悲三昧水懺》※20:15-22:00	24 大阪西成区夜回り 16:30-17:30 (読経)《慈悲三昧水懺》※20:15-22:00
25 料理教室 (枚方) 10:00-15:00 (読経)《慈悲三昧水懺》※20:15-22:00	26 うらら障礙者昼食交流 10:00-13:00	27 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	28 (読) 仏典系列 13:30-15:30	29	30	31

六月 June

◎東京23区 ◎関西地区

日	月	火	水	木	金	土
1 清掃活動 09:00-12:00 ボランティア研修 09:00-12:00 ボランティア研修 09:00-12:00	2 代々木炊き出し配布 9:30集合	3	4	5 写経 13:30-15:30	6	7
8 中国語大人クラス 13:00-15:00 料理教室 (枚方) 10:00-15:00 大阪西成区炊き出し・夜回り 14:00-18:30	9	10 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30 楽しいミシン教室 (初心者) 10:00-15:00	11 (読) 仏典系列 13:30-15:30	12	13	14 料理教室 (尼崎) 10:00-17:00
15 ボランティア研修 9:00-17:00 ボランティア研修 9:00-17:00 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00	16 代々木炊き出し配布 9:30集合	17	18 (読) 仏典系列 13:30-15:30	19 写経 13:30-15:30 写経 (甲子園) 13:30-15:30 (読経)《薬師経》※ 10:30-12:30 (読経)《薬師経》※ 10:30-12:30	20	21
22 ボランティア研修 9:00-17:00 ボランティア研修 9:00-17:00 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00 料理教室 (枚方) 10:00-15:00	23 うらら障がい者昼食交流 10:00-13:00	24 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30 楽しいミシン教室 (初心者) 10:00-15:00	25 (読) 仏典系列 13:30-15:30	26	27 (読経)《慈悲三昧水懺》※20:15-22:00	28 (読経)《地藏経》※ 20:15-22:00 大阪西成区夜回り 16:30-17:30
29 中国語大人クラス 13:00-15:00 (読経)《地藏経》※ 20:15-22:00	30					

※(読経)→下記ウェブサイトリンクよりご視聴ください。https://connect.tzuchi.im/dharma/

(読)→読書会

*上記表は予定が変更になる場合がありますので、参加する前に必ず事務局までお問い合わせ下さい。



■ 大阪の小学生は慈済のプレゼントに興味津々です。写真 / 中村瓊珠

心は台湾の友へ

一月二十一日の地震支援

気候変動の影響で世界各地で災害が頻発する中、二〇二五年一月二十一日に、台湾の嘉義、台南地域で再び大地震が発生しました。この時も浜小学校の生徒達は、台湾に住む友達の事を思い、募金活動を開始しました。子供達は休み時間を利用し、校内で募金を呼びかけ、今回も大きな反響がありました。活動後、児童会は再びその募金を慈済へ寄付することを決定しました。

三月七日、西尾光弘校長からの連絡を受け、慈済ボランティアが学校を訪問。西尾校長の案内で、児童会の五人の代表が放課後に応接室に集まりました。式典は和やかな雰囲気で行われ、自己紹介の後、大阪のボランティア陳靜慧氏が募金を受け取りました。今回は白い封筒ではなく茶色いクラフト紙の封筒に入れられ

ており、中には放課後の時間を使って寒風の中、募金を呼びかけた子供達の「温かい」愛が詰まった硬貨と紙幣が入っていました。

ボランティアからは福慧粥の結縁ギフトが贈られ「食べ終わった後は貯金箱にして、また誰かを助けるために使ってね」と説明しました。大愛感恩科技の環境保護ペンもプレゼントされ「このペンは台湾の環境ボランティアが回収したペットボトルから作ったものです。一本に何本のボトルが必要か、わかる？」と尋ねると「五本？」「二十本？」と声が上ががり、答えが「一本」と聞くと、子どもたちは驚いた表情を見せました。「防災教育は大事。リサイクルも防災行動の一つだよね？」と問うと、皆うなずいて同意していました。

西尾校長は「慈済は台湾にある大きな国際的組織で、世界中で災害支援を行っています。昨年

の能登地震の時にも、慈済のボランティアが支援に駆けつけました」と子どもたちに補足しました。

防災教育が同校の特別カリキュラムであるため、この日、ボランティアは特別に慈済が提供している防災・災害救援物資である福慧隔屏、福慧テーブルと椅子などの「七つの宝」の資料と写真を西尾校長に提供しました。帰る前、慈済のボランティア達は子どもたちと田んぼになって交流を深めました。

「皆が出したお金は、お小遣い？それともおうちの人からもらったの？」「自分のお小遣いです！」と元氣よく答える子どもたちに「本当にすごいね！小さいのにこんなに思いやりがあるなんて、立派だね！」と声をかけると、子どもたちには満面の笑顔がこぼれていました。





環保毛毯與披肩 來自全球的愛

見舞金發放現場，同步發放環保毛毯與披肩，希望能為一無所有的受災鄉親，提供最即時的愛與呵護。

2025.04.05 攝影/朱家立